

図画工作科の指導について - 実践力をつけた指導者の育成をめざして -

| | |
|-----|---|
| 著者 | 伊藤 雅康 |
| 雑誌名 | 紀要 |
| 号 | 20(別冊) |
| ページ | 281-293 |
| 発行年 | 2018-03-20 |
| URL | http://doi.org/10.32125/00000026 |

図画工作科の指導について — 実践力をつけた指導者の育成をめざして —

伊藤 雅康

キーワード：図画工作科教育法、図画工作科概論

はじめに

子どもは制作することへの好奇心と期待感で満ちている。そしてその表現は実に自由で多様である。指導者はその全てを受け止める自信と指導できる実力を身につけるべきであると考えている。また、子どもたちが楽しく意欲的に学習に取り組み、感性を發揮できるように支援する力を身につけて欲しいと願っている。そのためには学習指導要領の基本を踏まえ、造形的な感性や想像力・技能などの幅広い資質や能力を身につけるだけでなく、指導者自身が自らの力量を高め、表現の幅を広げる努力を継続することが必要である。

しかし、筆者自身が現役教師時代に経験した中にはなかなか厳しい状況もあった。要約すると以下のような点である。

- ・本来子どもたちは絵を描いたり、ものを作ったりすることが大好きであるにも関わらず、学年が上がるに従って、そういった意欲を失っていく子どもが増えていく。
- ・子どもの創作活動を充分支援しきれない悩みを持つ指導者が少なくない。それが自信のなさとなり、意欲的な自己開発の妨げにもつながっている。

情報技術の進歩に伴い、断片的な知識を手に入れることや、基本的な技術を駆使することはたやすくなった。このような時流の中にあって創造的な表現ができることや豊かな情操を持つことは未来ある子どもたちにとって今後ますます重要なものとなっていくだろう。

そこで、図画工作科教育法の中でこれからの指導者となる人材には上記を包括した広い見識と高い指導力を身につけ、自己研鑽を積んでいって欲しいと願っている。

1. なにを目指すのか

いきいきと絵を描き、ものを作り、感じたことを話す。そんな子どもたちを常にイメージしながら教科指導のあり方を考えていきたい。

図画工作科の指導者に求められるものは何か。細かなことを言いかけるとキリはない。しかし、どういう指導が理想的か、現実はどうか、自分に必要なことはどんなことか、学生たちに問いかけ、時に道しるべを示し、よりよい教科指導ができる資質を身につけることをねらいとする。指導者として、学習指導要領を充分に理解し、幅の広い力量を身につけ、

子どもたちがこの教科の中で表現や鑑賞の活動を通して創造性と感性を育み、豊かな情操を養うことができるような授業を目指したい。

子どもたちは常に成長を続けている。その段階に則して適切な支援が必要であり、その研究も多くなされているところである。ここでは子どもたちの個人差あることを前提に主にV. ローウェンフェルドの発達段階理論と筆者の経験を元に論を進める。また、特別な支援を要する子どもへの対応と特別支援学級の指導は、それぞれの集団や子どもの状況を正しく把握した上で、個性を大切にしながら個に応じた支援が必要であることは前提として含み置く。

2. 子どもたちの現状

何事もまず状況を正確に把握しておくことが必要である。図画工作科授業の対象となる子どもたちの状況はどうか、経験からの視点が多くなるが以下にあげる。

(1) 「表現」について

子どもたちは基本的に、描いたり作ったりすることは大好きである。そこには好きなコトモノを自分のものにするという獲得欲、そして逆にいやなことや嫌いなことを外に出したいという排出欲がある。どちらも同じように『表現』とされるが、子どもたちが表現しようとするのは圧倒的に前者のほうである。後者はセラピーとしてよく用いられる手法の一部

である。

(2) 「鑑賞」について

他人の作品をながめるばかりが鑑賞ではない。日常ではあらゆる場面で様々な情報が入ってくる。その一部にこだわってよく観察し、自分の感覚と照らし合わせる。それが鑑賞である。そのため、鑑賞者には広く受容する心や感性が必要となる。許容するにも、否定するにもまずは取り入れないと始まらない。さらに、教育的観点からは「良さ」を見つけること、自分の感性との「共感」部分を探すことは大変大切なものとなる。

(3) 発達段階と個人差

学齢期の子どもの成長は、外見はもちろん内面も目を見張るものがある。かつて「啐啄(そったく)」という言葉がしばしば使われたころがある。禅の言葉で「雛が内側から卵の殻をつつくと親鳥が外側から殻をつついて、ひなが誕生する様」を表している。まさに教育は子どもの発達に合わせて、子どもに必要な支援をすることでその成果が十分に発揮できる。従って、対峙する子どもたちの内面の状況をしっかり把握することは大変重要である。さらに、発達段階は一様でなく、環境や個人によって全く違う場合もあることを認識しておくべきである。それは表現にも鑑賞にも当てはまる。

(4) 公開授業と日常の授業

しばしば公開授業を参観する機会があった。そこではほとんどの場合、ショーアップされ、子どもたちも配役の一人として緊張しながら参加している。また教

室に普段いない人たちが大勢いる。当然といえばそれまでであるが、そういった時間は1年間に数えるほどもない。目指すべき理想の授業を研究するための非日常の時間である。しかし、日常の授業では場合によっては図画工作の時間が息抜きの時間になって、中には騒ぎ出す子どもが出てくる状況もある。また、とても完成したとはいえないのに「先生できた」と何回も言うてくる子どもも現れるなど苦労されている先生方も少なくない。

(5) 苦手意識の芽生え

幼児の頃には所かまわず落書きして喜んでいる子どもたちが多く、それがいつからか他人に絵を見られることをいやがるようになり、ついには描くことをしなくなってしまう、もしくは描くことを嫌いになってしまう。そういう例をいくつも見てきた。また、自分はそうだったという大人に何人も出会ってきた。

なぜそうになってしまうのか。経験からいくつか思い当たることがある。

一つ目は心ない言葉の投げかけによる自尊心つぶしである。例えば子どもが「当然相手はわかるはず」と思って見せた絵に「これなに?」「へたやなあ」「もっと上手に…」などの言葉かけ。悪気のない場合がほとんどではあるが、それだけに気づかずに発せられることが多い。または、子どもの自尊心を傷つけたことに発言者が気がつかないことが多い。

二つ目は9才ころからのリアリズムへの目覚め、いわゆる「本物みたい」を良しとする発達段階である。例えば成長の早い子どもが、遅い子どもの自由な絵を

見て「それは違う。こう描くの…」などと、よかれと思って手を貸しても当の本人は不愉快極まりない。また、周囲の大人や年長者も「本物みたい、イコール、上手で良い作品」という思い込みが強いのではないだろうか。それは「本物のように描くことが上手」なのであって「本物のように描かなかつたら上手ではなく良い作品ではない」ということになってしまう。リアルな表現でなくても感動的な作品や技巧を凝らした作品はいくらでもある。簡単に「上手」という言葉かけをすることは、逆の「上手じゃない。イコール、下手」を意識させることになる。自分はどう思われているのか、子どもが不安を感じるだろうことは容易に想像がつく。

三つ目は「複雑な多様性を好まず、わかりやすい単一性を指向する傾向」である。特に仲間意識が芽生えてくる発達段階では「みんなと一緒に」が大きな価値観を持つ。他人と違うことをしたり、言ったりすると「みんなと違う」ことになり仲間はずれになってしまう。みんなが気がつかないことをしたり、思いついたりする個性の尊重や多様性を許容できるのは子ども個人の発達ではかなり成長してからになる。そこで必要なのが指導者の適切な言葉かけや、一方向へ進みたがる集団の視野を広げる技量である。

これらは小学校学齢期の図画工作の授業を想定しているが、そのまま他教科や、大人へもあてはまると考えている。指導者はこのことを常に気にとめ、配慮する必要がある

3. 指導者の現状

小学校は基本的に担任が全教科を指導する。最近では状況に応じて、また教科によっては専科の指導者を設置することもあるが、本来、担任が全教科の指導を求められる。

加えて、英語・プログラミング・道徳の教科化、生活指導の多様化、保護者対応の複雑化、説明責任の重視に伴う記録等の整理など、今後ますますの多忙化は想像に難くない。

その指導者の状況はどうか。以下にあげる。

(1) 先生全員が図工が得意なわけではない

当然ながら誰にも得手、不得手がある。ところが前述のように本来的に基本的には担任が全教科を指導しなければならない。音楽が苦手、体育が苦手等々いくら例をあげることはできるが、ここではもう少しきつめて、具体的に、何について得手、不得手なのか考える必要がある。図画工作について言えばたとえば絵を描くことが得手、不得手。さて、それは本当に指導力に関係あるのだろうか。もちろん得手であったほうが自信が持てるかもしれない。しかし、不得手だからこそそういう子どもの気持ち理解しやすく、また子どもがなにに困っているのか、よくわかるということも充分ある。さらに、不得手だからこそ謙虚に基本から授業研究や教材研究をすることにもつながるかもしれない。何事でもそうであるが、あながち得手だと思い込んで過信

している場合のほうがうまくいかないことがある。技術的な得手、不得手が必ずしも指導力に反映される訳ではない。

(2) 分業されている教育現場

どこの職場でもそうであるように、学校もまた仕事の合理化のため、いろんな校務が分業化されている。図画工作科で言えば、多くの小学校が図工主任という立場の先生が学校全体の図画工作科を統括する。教科研修等の出張も図工主任か、せいぜい広げても校内の図工部会メンバーのごく少数に限られる。こういう出張等は先進的な取り組みや授業ネタなどを仕入れるチャンスである。しかし、研修への参加者が各学校に帰って、研修内容などを全体に伝達できると良いが、多忙を極める学校現場でこの時間の確保は非常に困難である。どの教科も一部のリーダー的先生の専門的意識が強くなり、教科のエキスパートとなる代わりに、他の先生は“ついて行ければ上出来”といった感覚に陥りやすい。すると、ずっと外部の図工関係と関わらないまま自分の周辺が最前線という、「井の中のかわず」的状况が生まれることになる。

上記はマイナスのスパイラルを想定したが、特に近年は各学校ではそうならないように様々な努力がなされており、先生方個人の研鑽意識を高める工夫もなされている。

4. どうするのか

授業の主体は子どもたちである。では指導者はどうあるべきなのか、何をどうすべきなのか、一部筆者の授業実践の例

もあげながら考察を進める。

(1) 子どもの立場に立った授業計画
常に相手の立場で考えるということは何事によらず、物事を潤滑にすすめる上において大切である。授業においても、一枚の指導案、一つの事柄について、学級全体にはこれでいいのか。子どもたち各々には適切なのか、子どもたち一人一人の顔を思い浮かべてシミュレーションを繰り返し、より上質なものを追求していかなければならない。そのためには学級全体の状況、個々の子どもたちの状況をより正確に、また多角的に把握しておくことが前提である。子どもたちは正確でわかりやすい支援を必要としている。また、場合によっては自分自身で考えることが必要なかもしれない。子どもの立場に立って、そこを見極めるのも大切な技量といえる。

(2) 教育現場が求めるのは「絵」でなく「指導」が上手な指導者

小学校は専門家を育てる所ではない。図画工作科で言えば、画家や彫刻家を養成する所ではない。誰もが広く美術を愛好し生涯豊かな社会生活を送れることが大きな目的である。ということは、指導者自身が絵が上手である必要はない。描いたり、作ったり、見たりすることが楽しめる人で、その楽しさを子どもたちに伝えることができるということが大切で、その姿勢から子どもたちは学ぶことになる。ここは何より先生として重要なところである。その姿勢こそが高度な指導力を生み出し、生き生きとした授業を作り出

す。

(3) 誰もが ある程度の基本は身につけておきたいと願う

とはいうものの、責任をもって指導するにはある程度の基礎が身につけていないと、自信を持って子どもの前に立てないということもある。大学ではそのために各授業が設定されているのだが、図画工作科でも基本的な道具やその使い方、基本技術、色や形の学習、創作の実習などがある。これはあくまで指導する上での基本を身につけるためである。教職に就いたあともこの基本の上にさらに深まりや広がり求めていってほしいと願う。

○基礎知識、基礎実習の具体例

「絵の具の三原色と混色」「色の三要素」「クレヨン・パスの技法」「遠近法」「絵の具の成り立ち」「技法・モダンテクニック」「描画」等。

○「絵の具の成り立ち」説明図

| 絵の具の成り立ち (概要) | | | |
|--|-------------------|---------------------------------|---------------------------|
| 自然素材 例：土、鉱物、動植物、 等 | 素材 | 人工的な合成素材 例：カドミウム、 鉛、クロム、等 | |
| ↓ | | | |
| 色 の 粉 | | | |
| そのまま 固める | 水とのり成分で 溶く | | 油分で 固める |
| コンテ パステル チョーク | 日本画顔料 (にかわで溶く) | 水彩絵の具 アクリル絵の具 (水溶性樹脂で溶く) | 油絵の具 クレヨン パス 色鉛筆 |
| 透明(染料系):粒子が細かい 例:インク、墨、染料 不透明(顔料系):粒子が大きい 例:ポスターカラー、ペンキ | | | |

(4) まずは先生が楽しむ

どの教科の授業でもそうであるように、先生が楽しい雰囲気を持っていれば、子どもたちも楽しく能動的な学習活動をするようになる。子どもたちが意欲的に取り組めば、自然に先生はより授業を充実させようと努力する。このプラスのスパイラルを作ることこそが指導者としての醍醐味である。

その入り口は、まず子どもたちに興味・関心を持たせること、授業で言えば導入部分である。もしくはその前に子どもたちの状況に合わせたしかけをする。例えば、ただ「次回は写生するから絵の具を持ってくるように」と伝えるのではなく、「外の葉っぱの色が変わってきたね」とか「校舎ってじっくり見たことある？」などのように、まず子どもたちに「ん、なにになに？」と思わせるような一言から入っていく。

そこから描いてみたい、よく観察したい、思ったように彩色したいなどの広がりや深まり、質の向上を求めたいという、人が本来持つ本能的なプラス面を引き出していく。さらに先生が「お、そういう所に気がついたか」とか「丁寧に描いたね」「ドンと迫力があるね」などのことばかけでプラスイメージを与えながら、指導を楽しむ気持ちをそのまま子どもたちに伝えていきたい。

(5) 教材研究の意味

ものごとは常に変化をしている。また、それはその変化に対応する力が常に求められているということでもある。

どの教科や分野でも子どもたちにより

よい学習を提供できるよう日々教育研究が進められている。それは、各教科の授業のあり方や手法、教材など多方面にわたるが、図画工作科も例外ではない。よりよい授業を研究することはもちろん、図画工作科の学習にはほぼ例外なく、表現するための道具やそれを使う技術が必要である。鑑賞をするにしてもその対象が必要になる。それらも日々進歩し、また多様化が進んでいる。

ということは指導者は、子どもたちに幅広い学習活動を提供するための研修を常に必要とすることになる。これは公の研修も個人的な研修も含む。授業を前にした場合は、まず指導者自身が教材を熟知しておくことが必要となり、これが教材研究である。

○基礎的な技法・モダンテクニックの例示

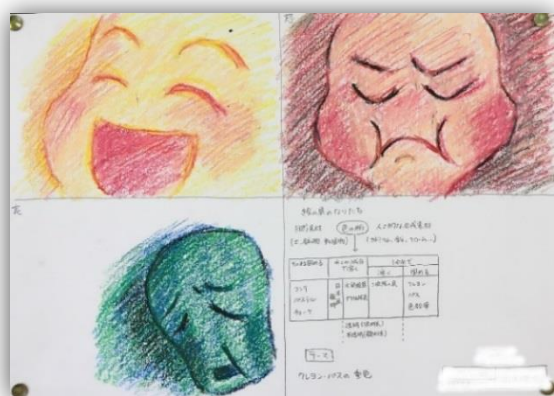
| 技法、モダンテクニックの一例 | |
|-----------------|--|
| パチック(はじき絵) | クレヨンなどで描いた後、水分が多めの絵の具をぬり、はじかせる。 |
| ドリッピング(吹き流し) | 画面に多めの絵の具を落とす、流す、吹き飛ばす。 |
| フロッターージュ(こすり出し) | 凹凸のある物に紙を当て、上から鉛筆やクレヨンなどで形をこすり出す。 |
| コラーージュ(はり絵) | いろいろな物を画面に貼り付ける。 |
| スパッタリング(霧吹きぼかし) | 金網でブラシの絵の具を霧状に飛ばす。型紙等も使う(エアブラシはスプレーできる器具。) |
| デカルコマニー(合わせ絵) | 吸水性の低い紙などに絵の具を挟み込み、はがす。 |
| マーブリング(墨流し) | 水面に油性の絵の具やインクを浮かべ、吸着性の高い紙などで水面から写しとる。 |
| スタンピング(型押し) | ものに直接絵の具をつけて、画面に押し当てて形を写しとる。 |
| スクラッチ(削り出し) | 下地に彩色し、上を黒色クレヨン等で覆い削り出す。 |

教材研究は道具や技法といったことだけでなく、学習のねらいの明確化、子どもたち一人一人に適切か、適切でない場合どう工夫するか、それでも無理な場合、全体を見直すか、など考慮する必要がある。かつて先輩から「段取り九割」と言われたことがある。このことである。

このとき必要になるのが、基礎の習得である。技術的な上手下手は関係なく、一度でも自分が基礎的なことを経験、あるいは学習しておくか否かは「子どもたちにどう伝え、支援すればよりよいか」を考えるとときに、一つの指標を持っているか否かということになる。

特に活動をとまなう学習においては、事前の教材研究は安全確保や思いもかけないつまづきを防ぐ役目もある。指導者が子どもになったつもりで一通りやってみることで、道具の使い方、危険が発生しやすい活動、授業全体の流れや支障をきたす動線、等々実感として理解、予測できる。

○基礎的な実習の学生作品例



① クレヨン・パスによる表情の表現

② クレヨン・パスによるスクラッチ表現



(6) 指導者が幅広く興味を持つ

好奇心というのは意欲の動機付けとして、特に子どもには大きな比重がある。科学でもそうであるように「何だろう？」から始まる。図画工作科も同じような側面がある。当たり前であるが、世の中には教科書等に載っていること以外のことのほうが多い。子どもたちもいろいろな刺激を受けながら生活している。そこには当然多様な感性が生まれ、個性が育つ。

指導者としては、それらをできるだけ幅広く知っておいて損はない、どころか大変重宝する。いろいろな自然現象、伝統文化、ポップカルチャー、古代文化、最新科学、子どもたちの好きなテレビ番組、等々、あげればキリはない。全てをくまなく網羅することは無理としても、指導者自身がいろいろなことに興味を持っておくことは、子どもたちの感性を理解し、指導者側からも子どもたちの琴線に触れる働きかけができることとなる。

(7) 多様な感性と鑑賞

人は個性として少しずつ違った感性を持っているが、一方で前述のように「複

雑な多様性を好まず、わかりやすい単一性を指向する傾向」がある。近年特に、多様性がこれからの社会にとってのキーワードとなることはあらゆるところで言われているとおりである。

鑑賞の授業でもこの多様性がキーワードになる。一つの作品を取り上げて子どもたちの感じたことを聞き出したとして「その感じわかるな」と共感することもあれば「そういう見方もあったのか」と、今まで気づかなかったことを発見することもある。それを、自分に取り入れる姿勢を他の子どもたちに示すことで、鑑賞者全員の感性の幅を広げる。そういうことの積み重ねをしていくことが鑑賞の内容の充実につながり、また様々なアプローチも見つかっていくことになる。

○「動き」をテーマとした学生作品



(8) 評価は厳格に、しっかりした評価が信頼を築く

授業をすれば評価は当然必要になる。到達目標にどれだけ達しているかを評価する絶対評価をする。他と比較して行う相対評価ではない。そのため評価の基準

をしっかりと設定しておくことが大切である。評価基準の内容は発達段階や授業内容等から多角的な視野を持って行われるべきである。評価される側の子どもたちにとってみれば、わかりやすく納得のいくものである必要がある。そのためには授業ごとの振り返りや、短いスパンの小評価、その都度のわかりやすい説明が大きな役割を果たす。評価の基準は説明責任を果たす上でも重要となる。従って、記録やわかりやすい基準の作成は、その都度の客観的な視点とともに第三者に受け入れやすいものとする必要がある。これらが累積して信頼関係を築き、同時に指導者の力量の向上に資することとなる。

(9) 指導計画、指導案

学校では様々な教育活動が複雑に関係を保ちながら組み込まれている。最も基本になるのが各学校の年間行事計画である。校内行事はもちろん対外的行事、学年行事、曜日や祝祭日との関係等様々なバランスがとられている。

その中で図画工作科の指導計画はどういう進め方をしていくのか、展覧会との関係はどうか、他学年との関係はどうか等々配慮が必要である。一つの題材を設定するとして、子どもたちの状況を思い浮かべながら、季節は適当か、行事の取り組みや、長期休業でぶつ切れにならないか、時間的余裕はあるか、他の学年や学級とのバランスはどうか等、十分な検討が必要で、学校現場ではそのための情報交換が毎日のようになされている。

単元や題材、授業時間ごとの詳細な計画が指導案である。子どもの実態や学習

の状況等を加味してどういう授業をしていくかを、発問や制作の支援内容など一つひとつを検討し、授業全体の流れや子どもたちの反応をシミュレーションしながら丁寧に吟味していく。現場経験のある教師と学生との最も大きな違いは“子どもたちの様子をどれだけリアルにシミュレーションできるか”にある。筆者がかつて勤務していた小学校に大学生がボランティアをしたいと申し出てくれた。とりあえず集団下校時指導と一緒に子どもたちと関わってもらうことにしたが、大学生はどうしていいのかオロオロするばかりで「ただ子どもと話すだけがこんなに難しいとは…」と肩を落としていたことがある。当然彼らも十分なシミュレーションをして笑顔で接しようとしていたが、うまくいかない。事ほどさように、ただ頭の中だけでシミュレーションしていても、いざ子どもの前では簡単にはいかない。その溝の大きさをできるだけ埋めて、現実近くしていく作業が必要になる。

始めて指導案を作る学生にとって、指導案とはどういうものか、どんな構成になっているのか、何から始めればいいのか、全く分からないのが普通である。従って最も適していると思われる最初の学習は、公開授業等で使用されたような充分練られた指導案を読み込むことである。当然、学生へは着目点やなぜそうになっているかなどの適切なアドバイスが必要である。

(10) 模擬授業

特に学生の場合、前述のように子ども

たちとの生の交流感覚がないので、あくまで理想を求めた指導計画に陥りやすい。そこで、できるだけ現実に近い想定をするため、そして作成した指導案を練り直すために大切なのが模擬授業である。いろいろな方法が考えられるが、いくつかをあげる。できれば、いずれの方法も子ども役の学生を設定し、多様な個性の子どもがいることを念頭に模擬授業を受け、事後のフィードバックの時点でできるだけ多くの意見が出るのが望ましい。

・指導案全てを流して行う…これは時間を必要とするが、授業全体の流れや、活動を要する内容の場合子どもが集中しにくいとか、動線がなめらかでないなどのことを実感できる。子どもの理解や活動のスピード、また、つまづきやすい学習内容へのフォローなど、状況を想定しておくより現実的な内容となる。

・指導案の一部を取り上げて行う…これは短時間で行うことができ、先生役は見たいところを抜粋でき、作成した指導案の核となる部分のアピールができる。逆に不安な部分を多数の目で軌道修正してもらい機会にもなる。場合によって指導案のどの部分を行うか、先生役以外が指定することもよい学習になる。また、大切と思われる部分を充分練り直すことで自信を持った授業ができることにつながる。

・提示された課題・条件で行う…これはまさに指導者としての実力を問われる。学生は事前に課題を与えられる。例えば「5年生で初めての1版多色木版の制作をする導入と説明を5分間でしなさい。この学年は4年生で単色木版は経験して

いる」など。これには学生自身の知識や体験、子どもたちへの関わり方、機智に富んだ発想、上質な対応力、等々総合的な授業能力が必要となる。

(11) 準備や片付けをできるだけ子どもたちにさせる

道具を使う教科においてその取り扱いは大変重要である。生活指導の一端としてはもちろんであるが、特に図画工作科に絞って準備段階、活動中、片付けと三段階に分けて考えると以下ようになる。

準備段階…今回は何をするのか、そのためには何がどれだけ必要か、どう置けば良いか、このようなことを考える必要があり、そこには必然的に自分の行う活動の具体的なイメージを作らざるを得ない。その規模や学級全体の流れを見て指導者がアドバイスすることは必要になるが、子どもたちにしてみれば、準備をしながら「こんなことをしよう」「他にもできることはあるかな」「どんな手順がいいか」「こんなことに気をつけなければ」等といった活動への期待感とともに、具体的なイメージを持つことでつまづきが少なくなり作品の完成度も高くなる。

活動中…きちんと道具を使い、丁寧な扱いをすることは使う道具によっては安全を確保することになる。また、例えば絵の上に水がこぼれたり、絵の具のついた筆が転がるなど不本意な失敗が少なくなる。子どもたちの心はもろいところがあって、こういったことで突然期待感をなくし、やる気を失うことが現場ではよくある。特に集中している場合に起こりやすいので、指導者は子どもたちの動き

とともに道具等の状況も把握しておくべきである。

片付け…片付けは今回の終わりでもあり、次の準備でもある。例えば、パレットがきれいに洗えていないと次に開いたときにやる気は減少する。絵の具のフタがしっかりしまっていないと固まってしまい使いようがない。彫刻刀がどこかへ行ってしまっただけでは何もできない。ここで指導者が気をつけたいのが片付けを始めるタイミング。何も指導をしないと、誰かが早く片付け始めると、われもわれもとなだれをうつように、多くの子どもたちが制作が途中でも片付け始める。こうなると場合によっては他人の作品を踏んづけていることも気づかず水道へまっしぐらということもある。子どもたちはワーワーと騒ぐし、トラブルは起こるし、誰も悪気はないのに…ということになってしまう。では、どうするのか。「みんなが満足できる作品を作るために、先生が『後始末を始めてください』というまで、できた人も席を動かさないでください」旨のことを、しっかりタイミングを見て子どもたちに伝える。もちろん後始末にどれくらい時間が必要か吟味しておく必要はある。

5. 基本に戻る

…まず子どもの持つ創作意欲を刺激

冒頭にも述べたが、子どもは制作することへの好奇心と期待感で満ちている。制作への好奇心とは何か。自分がどんなものを制作できるのか自分への好奇心である。描くこと、作ることが面白くてし

ようがない。創作の原点である。

子どもはよくアニメのキャラクターや好きな動物を描く、動物は良しとしてもアニメのキャラクターを丸写しすることが創作か。と疑問を持つのは至極当然であるが、そのとき子どもは全く違う世界にいる。大好きな対象の持つイメージを自分と同化させたい一心なのである。思ったように描ければ自分もかっこいいヒーローにも、かわいいキャラクターにもなれる。そういう想像の世界の中で自由に飛び回っているのである。

図画工作科の授業ではこの子どもたちの持つ旺盛な創作意欲をいかに刺激するか、そして維持継続させるかが指導者として大切となる。題材や道具、テーマ、技法など制作のきっかけやヒントは指導者が計画に沿って与えるが、誘導しすぎると画一的な方向に暴走し、どの子ども同じような作品になったり、こうでなければならぬといった硬直した価値観に陥りやすくなる。「多様な感性と鑑賞」の項でも述べたような、共感と多様性で感性の幅を広げることからはほど遠いものになってしまう。よかれと思うアドバイスも誘導しすぎにならないよう、口に出す前に今一度考える必要がある。

(1) “ほめる、認める” で自信とやる気を引き出す…「できました」への対応も同じ

他人の目が気になる頃になると、自分の作品はどう見られているのか、まるで自分自身の心の中を見られるがごとく気にし始める。このとき救いとなり、元気づけてくれるのがほめられること、認め

られることである。但し「上手にできたね」は禁物。逆に「下手」ということが別にあることを示唆するからである。ではどうするのか。「この形よく工夫したね」「この色の組み合わせよく考えたね」「大胆で迫力があるね」など、本人が頑張ったことを具体的にほめる。また、本人が気がついていない良いところを見つけて認める。これがプラスのスパイラルを作り出す。

授業の制作活動もまだ半ばであるにもかかわらず、「先生、できました」と、どう見ても充分取り組んだように見えない作品を持ってくる子どももいる。こういった子どももほぼ同じ方法で対応できることが多い。飽きてきたり、うまく制作が進まなかったりすることがほとんどなので、自尊心をくすぐって、少しでもやる気が引き出せれば教師冥利につきる。そのためには子どもたち個々の状況をよく観察していないと、適切な声かけができなくなってしまう。

(2) 創作のプラス・スパイラル

“きっかけ・楽しさ・表現の工夫・少しの挫折・多くの達成感・次への創作意欲の喚起” このサイクルが子どもたち自身の力となる図画工作科学習を作ると考えている。

“きっかけ” …授業では指導者が計画的に、楽しさと創作への期待感をもたせ、子どもたちの創作意欲を刺激する。子どもたちはそれにインスパイアされる。

“楽しさ” …子どもたちは与えられた範囲のなかで、発想や技法など自由に自分の限界を広げる。指導者は個々に応じ、

適切なアドバイスで楽しさを増幅させる。

“表現の工夫” …子どもたちは指導者から与えられた表現のヒントを元に自分の考えと技量で独創の世界に入っていく。

“少しの挫折” …子どもたちはうまくいかないことも経験する。自分でクリアできる場合もあるが、指導者とともにどうすれば良いか考え、試行を繰り返し、クリアするか、別の道を考える。何事においても挫折を乗り越えることは大きな自信と意欲につながる。

“多くの達成感” …子どもたちも指導者も、完成した一つの作品に集約された思いや努力を味わう。

他人の作品へも視野が広がる。

“次への創作意欲の喚起” …子どもたちは創作活動の中で成長を実感し、充実感を得ているので、次は何をしようか楽しみではない。

「先生、次はどんなことするの？」

この「創作のプラス・スパイラル」が理想的な図画工作科教育のための一つの形、そして、意欲喚起から能動的な学習へ進むアクティブラーニングの一つの形でもあると考える。

○「素材を活かす」をテーマにした学生作品



素材：木の皮、かんなくず、竹、包装紙、色画用紙、バドミントンのシャトルコック

おわりに

図画工作科は他の教科のように題材や教材が特に決まっていない。それだけに指導者の持つ選択枝の多さ深さが大きく影響する。図画工作科教育法を学んだ学生たちが、子どもたちといきいきした授業を作り上げられるよう、筆者自身もまた研鑽を積み上げていきたい。

子ども学科・非常勤講師

— 参考文献 —

- 小学校学習指導要領 平成29年3月
文部科学省
- 第63回滋賀県美術教育研究大会研究
紀要
平成26年8月22日 滋賀県美術教
育研究会
- 模擬授業・場面指導
野口芳宏 2018年度版 一ツ橋書
店
- 絵心がない先生のための図工指導の教
科書
細見均 2017年7月 明治図書
- すべての子どもがイキイキ輝く！
学級担任が作る図工授業
今井真理 2017年10月 明治図
書